子どもを加害者にさせない未来のために

元イスラエル兵・ダニー・ネフセタイさん

協会が参加し、署名活動などでも協力関係にある大阪母親大会実行委員会が、5月31日大阪市内で、元イスラエル兵で現在は埼玉県に暮らすダニー・ネフセタイさんを招き、講演会を開いた。講演概要を紹介する。

おかしいのはイスラエルの教育だったのかも

私はイスラエルに生まれ、軍隊が必要だと教育を受けて育った。18歳になると徴兵制によって一つの疑問も持たず軍隊に入隊した。3年間軍隊にいたが、空軍パイロットの試験には合格できず、涙にくれた。それで45年前、傷心旅行で日本に観光でやってきた。それがすべての始まりだった。

憲法なんかで国を守れる？

2週間の予定だったが日本のことが見えてきた。憲法9条、最初は訳が分からないと思った。国を守るのは軍隊だろうと。憲法なんかで国を守れるわけがないと。本当に驚いた。ところが、だんだん日本での滞在が長くなると、あれ？ちょっと待って。私がいた国・イスラエルでは軍隊が威張っていた。なのにずっと戦争が続いている。一方、この日本では憲法一つでもうずっと何10年も戦争がない。もしかしたらおかしいのは、イスラエル？私たちの国の方なのかもしれない。私が受けた教育の方が間違っていたのかもしれない。そのことに気づいた。その後、憲法が大切だとか、平和のことを話すようになった。戦争と人権について考えたことをお伝えしたい。

イスラエル人とパレスチナ人の歴史

さて、小さいガザに220万人のパレスチナ人が住んでいて、日常的にイスラエル軍の抑圧の中で暮らしている。それが戦争によってさらに大変なことになっている。始まりは一昨年10月7日、ハマスの戦闘員がイスラエルを襲って一日でイスラエル一般市民800人、イスラエルの軍人400人を殺害し、それに対してイスラエルは何千倍の力で反撃し、ガザを襲い続けている。でもこの混乱の発端は一昨年の10月7日ではない。

2千年前、パレスチナにはユダヤ人が住んでいた。これは間違いない。パレスチナとは、地中海の東に位置する沿岸地域。レバノン、シリア、ヨルダン、エジプトに囲まれた場所だ。ちょっと古い話だが、ユダヤ人はローマ帝国と戦い負けて、ほとんどのユダヤ人が土地を追い出された。ユダヤ人は2千年もの間、ヨーロッパや中東のいろんな国に散らばって住み、いつかこの土地に戻ろうという夢を捨てなかった。そのことをシオニズム運動という。150年前、ヨーロッパで始まって、この運動の一環として、私の父方の祖父母はポーランドからイスラエルに移住した。私の母方の祖父母もドイツからイスラエルに移住した。それぞれ1920年代に祖父母がイスラエルに移住したから今日の私がある。

ナチスのユダヤ人虐殺と犠牲になったパレスチナ人

私の祖父母以外の親戚はヨーロッパに残ったため20年後、亡くなった。ホロコースト＝ユダヤ人大虐殺が始まったからだ。ナチスによって5年間で600万人ものユダヤ人が殺された。ほとんどがガス室だ。私の親戚もたくさん含まれていた。ヨーロッパに残っていた親戚は全員例外なくアウシュビッツで殺されている。

ただし、忘れていけないことが2つある。1つは、このシオニズム運動によって、中東の様々なバランスが崩れたということだ。さらに大切なことは、このシオニズム運動によってパレスチナ人が犠牲になったことだ。彼らは一つも関係がなかったのに。

1946年、この土地にはアラブ人、つまりパレスチナ人が住んでいた。すでにパレスチナ人の土地だった。翌年、国連はパレスチナ人にこの土地の57%をユダヤ人に渡しなさいと言った。ユダヤ人は昔ここに住んでいたし、悲しいナチスによる大虐殺もあったし、やっぱりここにユダヤ国家を作るしかないと。けれどもパレスチナ人としてはそれ、全然面白くない。いくらユダヤ人がここに2千年前に住んでいたとしても、すでにパレスチナ人が住んでいる。はい、ユダヤ人の私たち戻ったからみんな出ていけと。わかった、出ていきますと。そんな簡単な話ではない。当然だ。パレスチナ人は反発して、第一次中東戦争が勃発した。

イスラエル周辺地図
提供：イメージマート

中東戦争後、イスラエルが75%を占領

イスラエルは圧倒的な力で、結局この土地の75%を占領した。パレスチナ人は残りの狭いヨルダン川西岸とさらに狭いガザのみとなった。ユダヤ人としては大勝利。パレスチナ人は5人に1人の70万人が故郷を奪われることとなり、アラビア語で大惨事＝ナクバと呼んでいる。

第一次中東戦争から19年後、1967年、第三次中東戦争が起こった。私は小学4年生だった。また、イスラエルは圧倒的な力で、ヨルダン川西岸とガザ地区を制圧して、ユダヤ人が入植していった。現在、このヨルダン川西岸に、60万人のユダヤ人が住んでいる。国際法としては絶対やってはいけないことをやっている。国はたとえどこかの国を占領したとしても、自分の国民をそこに移住させてはいけない。しかしイスラエルはやっている。

あの狭いヨルダン川西岸の中にあれだけユダヤ人が住んでいると、毎日のようにそこで問題が起こる。パレスチナ人が畑仕事をしていると、イスラエルの若者の入植者は嫌がらせで石を投げたりする。もっとエスカレートすると、パレスチナ人が生活の基盤にしているオレンジの木を、ブルドーザーで倒したり、パレスチナ人の家に火をつけたり、パレスチナ人の車の窓を割ったり、というようなことを毎日のようにやっている。今年アカデミー賞をとった映画「ノー・アザー・ランド～故郷は他にない」は、まさにこのことを映画にしたもの。ユダヤ人がパレスチナ人にどんなふうに抑圧を与えているかということがよく分かる。チャンスがあれば、ぜひ見てほしい。

なぜイスラエルがパレスチナ人にこういう暴力ができるかというと、これを支えるのはイスラエル軍の力、イスラエル軍の徴兵制だ。

イスラエル空軍戦闘機
写真：Science Photo Library/アフロ

街でナイフを振り回せば捕まるが戦闘機はかっこいい？

イスラエルでは空軍パイロット以上の憧れの仕事はありえない。本人だけではなく、イスラエルのお母さんにとっては、自分の息子がパイロットだったら、それ以上の自慢はない。学校の先生でさえ、自分の教え子が空軍パイロットだったら、もう大体みんな、毎年みんなに自分の生徒の誰々がパイロットだったと自慢する。

軍隊生活が始まれば検査が始まって、戦闘機のパイロットにふさわしいか判断される。初めの半年は勉強だけ。半年後から戦闘機を飛ばすようになる。私の時はフランス製の戦闘機、時速600㎞。今の戦闘機に比べると、まあ軽トラみたいなもんだけど、45年前としてはまあまあ。

しかし私は終盤の試験に落ちて、空軍への入隊ができなかった。

悲しみに暮れた私は日本に2週間の予定で旅行に出かけた。日本に来ていろんな気づきがあった。1つ目の気づきは戦闘機の目的が何かということだ。この機械、何のために作られたか。イスラエルで戦闘機を飛ばしていたくせに、一度も考えたことがなかった。よく考えるとこの機械、本当に複雑な機械だが、2つのことしかできない。人を殺すこと。物を破壊すること。あとは何もできない。卵焼き一つ作れない。なのに、戦闘機って言うとかっこいいっていう人、結構いる。なぜか。おそらく映画「トップ・ガン」で俳優・トム・クルーズのようなパイロットをみると、そういう認識になるのだろう。街を歩いて誰かナイフを振り回して殺すぞって言っていたら、どう考えても、捕まるだろう。なのに戦闘機の翼の下で同じように人を殺戮したり物を破壊してもそういう考えには至らない。

軍隊の持つ4つの危険

軍隊という組織は楽しい経験を積み上げるための組織ではない。軍隊の成り立ちの裏に、4つの恐ろしい問題がある。1つ目は差別。こちらは正義、向こうは悪。そういうふうに教えないと人間は戦えない。

一昨年の10月7日、ハマスが攻撃をしかけた。翌日イスラエルの防衛大臣は「ハマスは人間じゃない。動物だ」と言った。こっちはみんな人間。向こうはみんな動物。場合によっては殺しても仕方がないという論